

【社会】

地理・歴史・公民から1つずつの大問3題構成で、出題形式も適文（誤文）選択が大部分を占める点では、例年通りの問題でした。それぞれの大問ごとに冒頭で提示される文章も、昨年はそのボリュームが増えたのですが、今年はほぼ例年並みに戻りました。時事的な事項を問う設問は今年も出題されており、字数制限のある記述問題はこれで4年連続の出題となりました。本文や与えられた資料を正確に読み取ること、一文一文ていねいに読んで正誤を判断することなど、過去問研究の上できちんと対策を行った受験生であれば特に難しくなく、8割がボーダーと予想されます。

〔1〕日本の工業と貿易・代表的な石灰石産地（地理）

- 1 代表的な石灰石産地のある県（易）
- 2 工業地帯・地域の特徴（易）
- 3 大型船の用途（写真選択・易）
- 4 セメント工場が資源の産地近くに立地する理由（易）
- 5 世界各地の信仰（時事・中）
- 6 サンゴ礁について（中）
- 7 「黒いダイヤモンド」の産地や用途（易）

多くの資源を輸入に頼っている日本で、100%自給できる数少ない資源である石灰石とその産地について説明した文章を読み、地理分野の各設問に答える問題でした。日本の工業地帯・地域の特徴（2）や工場の立地条件を問う設問（4）は、昨年も出題がみられたテーマです。また、秩父や秋吉台などの所在地（1）や、6つの写真の中から燃料や鉱物資源の運搬船を選ぶ問題（3）などは、ふだんから地図や資料を活用した学習が出来ていれば容易に正解できる問題でした。世界各地の信仰（5）では、ミャンマーで起きているロヒンギャについての理解が問われ、サンゴ礁について（6）では、沖縄県の辺野古埋め立て問題への理解も求められており、この2題で正解できれば一步リード、といったところです。

〔2〕元号の歴史（歴史分野）

- 1 万葉集について（易）
- 2 各時代の改元の事例（中）
- 3 弥生時代の日本のようす（易）
- 4 元号法制定後初めての改元よりあとの出来事（易）
- 5 江戸時代の松前と対馬（易）
- 6 年代の表し方（易）
- 7 「和銅」への改元が行われた理由（易）

筑波大学附属駒場中 2022 年度入試 ～今年の出題傾向分析～

社会の授業で各班が発表するという形式は、昨年度と同じもので、今年は「元号の歴史」というテーマでの発表内容をもとにした歴史分野の出題でした。冒頭で示されたレポートから正確に情報を読み取る力が求められており、そこに受験生が今まで学習した歴史の知識を組み合わせることで答えていきます。2や4では、各班の発表内容もヒントとなっており、手持ちの知識とその場で与えられた情報を組み合わせることで正解を導き出すことが大切です。全問正解も可能な問題ですが、実際の受験生にきいてみると、選択肢の読み間違いも散見されました。落ち着いて各文を吟味するトレーニングが重要です。

〔3〕現代社会の「孤独・孤立問題」とその対策（公民分野）

- 1 新型コロナウイルス感染症の社会的影響（時事問題・易）
- 2 孤独・孤立の背景にある地域社会・家族のあり方・労働環境の変化（中）
- 3 日本の選挙のしくみと選挙活動（易）
- 4 本文中にある「社会的包摂」の考え方とその具体的政策（易）
- 5 災害への備えや対応（時事問題・中）
- 6 社会問題としての孤独・孤立とは（時事問題・中）

冒頭の文章のテーマは、2021年2月に「孤独・孤立対策担当室」が内閣官房に設置されたことを切り口として、新型コロナウイルス感染症の影響も深まる中で、現代社会の問題として「孤独・孤立」について考えていくというものでした。イギリスの先駆的な取り組みや、各国で課題とされる「社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）」という考え方などを解説しています。選挙に関する知識理解を問う問題（1）や、本文自体の理解力をみる問題（4）もあれば、新型コロナウイルス感染症の社会的影響（1）といった時事問題も出題されています。特にその要素が強いと思われるものに「時事問題」と記しましたが、現代社会が直面する課題を取り上げたこの大問3自体が時事問題ともいえ、昨年一年に限らず、幅広い視野をもった学習姿勢が問われています。本番でも、この大問で大きく差がついているはずで、筑駒合格のためには、日頃からこうした問題意識を醸成できるような環境づくりが大切です。